

総合福祉通園センターにおける外来保育の役割

姫路市総合福祉通園センター 発達相談室
保育士 辻本幸 井上綾子 西川朋子
臨床心理士 木田裕子 黒田知沙 奥村由紀

【はじめに】

つくし児童園・白鳥園が措置制度で運営されていた時代に当時の宮田広善所長の「定員外という理由で保育を受けられないのはおかしい」「入園を待たないと保育を受けられないのはおかしい」という考えの下、「療育は保育ベースでなければならない」という方針で立ち上げたのが外来保育というプログラム（以後、外来保育）である。その後措置から契約、障害観の変遷等様々な社会情勢の変化、また組織の再編成等といった当センターでの変化に対応しながら、時代の要請に応じ、対応期間、対象児、配置スタッフを柔軟に変えながらも、一貫して障害児を育てる保護者に寄り添い、親子の生活がうまく進むための支援を続けてきた。その実践について報告したい。

【外来保育が始まるまで】

「言葉の遅れ」「コミュニケーションの難しさ」「集団行動困難」等、様々な理由で保護者は総合福祉通園センター（以後、センター）を訪れる。現在では診断前事業の中でインテークおよび個別もしくはグループにおける発達評価を経て、必要なケースには花北診療所で主治医より診断が告げられる。

その診断後まず子どもと保護者に提供されるのが外来保育である。

【外来個別保育の開始】

主治医より「知的発達症」「自閉症・自閉スペクトラム症」「多動症」等という告知を受けたおおむね4歳児までの子どもと保護

者への支援のスタートが外来個別保育（以後、さくらんぼ保育）である（表1）。保育士と心理士がチームを組み、保育士は子どもが遊ぶ様子を観察しながら、あるいは一緒に遊びながら、子どもの発達段階、認知特性、発達上の課題等を把握する。心理士は保護者から診断にまつわる疑問や考え、時に気持ちの葛藤に耳を傾けながら、日頃の育児の様子ややりにくさ、困り事を聴取する。とりわけ障害のある子どもはトイレトレーニングの進みにくさや食事の面（偏食や食事中の立ち歩き等）での相談事が多く、そういったADL面での質問には、子どもの遊ぶ姿から推測される、今できる関わりを保育士がアドバイスする。また発達を促すためによいと思われる遊びやお手伝いのアドバイスをする。

例えば、子どもが知的発達段階よりも簡易で単純な遊び、やったことがあって知っている遊びを選択しやすいことや、失敗のない遊びを好みやすいことを保護者に伝え、家庭での遊ばせ方、遊びの広げ方の参考にしてもらうことはしばしばある。また「言葉が出ないだけ」と言う保護者に、言葉の遅れの背景にはしゃべる技術が育っていないだけでなく、「人と関わろう」「大人に見てほしい、聞いてほしい」というコミュニケーション意欲の薄さ等があることを子どもの姿を共に見ながら説明し、言葉を教え込むよりも遊びを通してやりとりの力を伸ばすことが大切であること、一緒に遊ぶことの意味を伝えることもある。

このような1回50分程度、月1~2回のさくらんぼ保育を通して、子ども、保護者

と信頼関係を築く。子どもが選択する遊びの観察から、その子のできそうな遊びを用意したり、保育士が主導権をもつ遊びを組み入れたり、その子の生活年齢（保育所生活）で求められそうな作業や活動を提供していく。その中で子どもの成長や課題を保護者と共有し、子どもが苦手とすることには一緒に取り組み、うまくいきそうなアイデアを提供する。

保護者からは家庭での様子が報告され、多くは回数を重ねるごとにエピソードが具体的に語られるようになってくる。エピソードが具体的に become ということは、それだけ保護者の視線が子どもに注がれるということであり、それによって子どもが成長を見せることも多い。

障害のある子どもの成長はその一歩が小さく、日々の生活の中では見落とされがちである。そういった子どもの成長を目の細かいザルですくい上げ、虫眼鏡を当てて大きくするかのようにして、保護者に伝える。それにより今まで気付かなかった子どもの行動の意味が分かって納得したり、心から共感することが増え、親子の関係がスムーズになり始める。また、子どもの行動を予測できるようになり互いの勘違いを減らし、生活がしやすくなっていく。それがさくらんぼ保育の大きな役割である。そして「相談する」ことの意味を保護者に感じてもらうことも大きな役割の一つと考えている。

表1 さくらんぼ保育実施件数

H29年度	H30年度	R元年度
318	442	566

【外来グループ保育】

さくらんぼ保育の中で、保護者と十分に子どもの成長ペースや認知の特徴、必要な働きかけが共有されると、そこでさくらんぼ保育は終了となり、主にリハビリで子ど

もの成長を積み重ねていくプログラムに移行する。

しかし多くの子どもの発達特性からくる関わりにくさや子ども自身の困り感は集団の中でこそ浮き彫りになりやすい。特に自閉スペクトラム症の子どもの中には好きなことがあれば飽きずにコツコツ遊び、家庭では「手がかからない」ことも多い。子どもの「地雷」を知る大人となら勝敗のあるゲームもうまくこなすこともできるが、集団となるとそうはいかない。

グループという集団の中では、子ども同士のやりとりが質量ともに難しいことやスタッフの指示、他児の行動、保護者からの働きかけ等人的環境への気付きにくさ、一斉活動に取り組まない等、子どもの困り感がある場面で見られる。保護者にとっては「なんでしないの?」「なんで嫌なの?」「なんで走るの?」といった「なんで…?」の連続となり、その一つ一つをスタッフや他の保護者と共に謎を解くように理由を探り、関わり方を考えていく。こういった作業を何度も繰り返しながら子どもの姿を通じて発達の特性を理解し、子どもに必要な支援を考え、適切な関わり方を工夫できるようになる。それが外来グループ（以後、さくらんぼグループ）の役割となる。

【さくらんぼグループの具体的な実践と活動の意味】

さくらんぼグループは2週に1回、1クールが4ヶ月（りすグループ、ぱんだグループ、きりんグループ）から6ヶ月（あひるグループ）の期間で取り組んでいる。グループの流れについては表2の通りである。

表2 さくらんぼグループの流れ

9:00~	打合せ
9:30~	自由遊び

9:50～	みんなで遊ぶ
10:30～	グループワーク
11:00	終了
反省会	

①自由遊び

スタッフは子ども達の発達に合わせた玩具や興味をもって欲しい遊び、家庭でも用意できそうな物等を準備し、遊ぶ様子や親子のやりとり、他児との関わり等を観察する。保護者にとっては家庭での遊びのヒントになったり、子ども同士のトラブルに遭遇した時にはスタッフの関わりが自分の関わり方のヒントになったりする。また毎回連絡帳を活用して気になることや相談したいこと等色々書いてこられるが、それについての確認や近況等個人のことを話す貴重な時間となる。

同時にスタッフと共に遊びの様子を観察しながら、例えば子どもが突然遊びを止めた理由が、離れた場所から聞こえた別の子への「おしまい」だと分かり、集団の中では様々な音を拾ってしまうことに気付く等、子どもの行動の理由をタイムリーに知ることができ、以後特性を意識しながら行動の理由を考えるきっかけになる。

②みんなで遊ぶ

大人も子どもも取り組みやすく親子で楽しめ、保護者の関わりが必要な遊びを取り入れるようにしている。

<親子で身体を使って遊ぶ>

よういドン・でんぐり返し・横転・大縄跳び・揺れ遊び・わらべ歌遊び・スノーボード・ボール遊び・サーキット等誰でもできる身体を使った遊びを取り入れ、しっかりと全身を動かす。大きな動きは子どもにも保護者にも分かりやすい。動く・止まる・跳ぶ・転がる等親子で楽しく遊びながら動

きそのものを実感し、必要なところで声をかけてもらったり、やり方を少し教えてもらったりしながら自分の身体を意識的に動かせるようになっていく。保護者はよく動き、活発だと思っていた子どもが、真似をして意識的に身体を動かすことが難しいことが分かり、我が子が皆でする体操を嫌がることに納得がいく。「手を上にあげて」ではわからず、「腕を耳にくっつけて」と言うことと分かる等、身体に気付くための具体的な声かけを考えるようになっていく。

乳児期から親子で密着して遊ぶことも少なかったと想像できる保護者自身のぎこちなさを感じ取れることもあり、「うまくできるだろうか」と保護者のドキドキ感さえ伝わってくることもある。「する人-させる人」の関係ではなく、「共にする人」となることで互いを支え合い、うまくいった時に親子で喜び合う姿は見ているスタッフもとても嬉しくなるものだ。心から親子で「できたね」「おもしろかったね」と共感できる場面になる。また、嫌な時でも笑ってしまう等表情では気持ちの読み取りが難しい子どももしばしばいるが、子どもが本当に楽しい時の表出が分かり、要求や拒否等のサインが見えやすくなることで、関係もスムーズになる。

適度な運動は大人にとっても気分転換になり達成感も伴う。ダイナミックな動きほど子ども達には分かりやすく楽しめるので、保護者も段々真剣に取り組むようになっていく。「この子にしてやれること」としての意義も大きい。

<わらべ歌>

歌やリズムは子どもの気付きや覚えの要因になり、分かりやすい。また繰り返し遊びながら期待して待つことを経験したり、見通しを持ちやすいので順番や交替等の理解につながる。

くすぐり遊びや姿勢の変換を楽しむ遊びでは、子どもの好きな感覚や苦手な感覚が分かり、保護者は子どもが楽しめるくすぐり方、触れ方を工夫するようになる。

そして親子が近い距離でゆったりとした気分で遊べるので、「もう1回」等要求を引き出したり、子どものサインを読み取る練習の場面になる。

<製作>

ハサミやのりづけ、シールを貼る、ペンで描く程度で簡単な物を作る。何をどう作るのかが分かって製作ができるように、まず見本として手順を見せる。それにより作業の流れが分かるので子ども達は意欲をもって取り組み、できあがりがとても嬉しい。保護者には難しいところを手伝うというスタンスで見てもらいながら、我が子がどこで困っていたのか後のグループワークで振り返る。

年齢に応じて使う道具は違うが、保護者は園から持ち帰る作品の出来栄えと製作の様子を比較して、「自分で作っていたんだ!」と驚いたり、逆に「出来ていると思って安心していたのに…」と、落胆したりすることもある。また製作中の子どもの手先の使い方や道具の使い方等を見て家での練習を始めるきっかけになることもある。スタッフにとっても子どものイメージする力や操作の力を評価する場面となる。

<絵本・紙芝居>

知的な遅れのある子ども達にとって、園では「分かる」お話を提供してもらえる場面は少なくなりがちで、ウロウロしたり友達に邪魔をするという話もよく聞かれる。さくらんぼ保育では子ども達の発達に合った絵本や紙芝居を選ぶ。絵本は座って見るものということに気付かせ、導入には同じものを繰り返し見せることで安心して臨め

るように工夫している。新しい物への興味の弱さ、見る時の姿勢の保持の難しさが、絵本を見れない行動につながることや、友達と一緒に見る時のマナーを教える等確認できることは多い。

③グループワーク

今のように情報が簡易に手に入らない時代には子どもが大きくなっても「さくらんぼの〇〇グループのお母さん達とは定期的に会っています」と仲間同士でつながっている話をしばしば聞いた。このようにさくらんぼグループでもう一つ大切にしているのは「同じ立場にある保護者同士の出会いの場」の提供である。診断を受けることで保護者は我が子と自分だけが急に特別な存在になってしまったような疎外感を感じることであろう。その中で子どもの些細な心配事でも同じ体温で分かってくれる仲間や、困り事を共有し工夫を相談できる仲間との出会いは、特に母親にとって大切な場となる。

グループワークの場面は、「ここでは言える」という安心した場でなければならない。またここは「子どものことを話しながら自分の思いを語る場」でもある。

グループワークは心理士が担当する。当日の活動を振り返り、活動中に押さえきれなかったことを保護者と確認したり、次回の活動の予告をしたりする。皆で活動を振り返りながら子どもの行動の意味や自分の関わりを見直し、深く考えるきっかけとする。また発達の特性を知る体験を取り入れ、子どもの不自由さを実感し、改めて我が子への関わりを見直し、我が子にとって分かりやすい関わりは何かと考える機会も用意している。例えば子どもの視野の狭さを体験すると全体を見ることが苦手なことが分かり、自分の知っている物しか気付かないことや探し物が下手なこと、足元の物を踏

みつけて、目的の物を取りに行ってしまうこと等の謎が解け、子どもに気付かせるための関わりが必要だと改めて感じる。また訳の分からない言葉で話しかけられるとオウム返しや苦笑いをするしかなかったり、固まってしまうことを実体験し「本当に今までかわいそうなことをしていました」と涙ぐんだ保護者もあった。子ども達の気持ちに気づき、障害の特性を深く理解するための体験である。

また連絡帳に、同じような悩みが書かれていたり、他の保護者の意見を聞きたいというようなことが書かれている時には、それを全体の話題にし、自分の経験を話したり、他の保護者の話を聞いたりしながら、それぞれの個性も互いに知る場となって、気持ちや考えを整理していく。自分にとって「しんどい話」が、みんなの中に還元されることで「私一人の悩み」ではなくなり、笑顔で次へ進むきっかけになることも多い。

保護者のグループワークの時間、保育士は子ども達と自由に遊びながらも密に関わり、新しい遊びに誘ったりできることとできないことを明らかにし、子ども達の次の課題やさくらんぼグループ終了後のフォローを考えるヒントにする。また子ども同士の自然な関わりの様子を見ながら、年齢に応じたソーシャルスキルを教える貴重な時間でもある。

以前は先輩保護者に経験談を話してもらう機会も提供していたが、1クールの回数を少なくせざるを得ない事情や個人情報保護の問題から現在は中止している。先輩保護者に子ども達の成長の少し先の見通しを提示してもらい、保護者自身が向き合わなければならない事らについて話をしてもらうことは本当に貴重な時間であった。

④ さくらんぼ講座

さくらんぼグループ終了児の保護者を対

象に2つのテーマで講座を実施している。1つは小児科医師による自閉症の講義で、もう1つは作業療法士による感覚特性に関する講義である。グループに参加して発達の特性や子どもの特徴を断片的に理解してきたことを整理し直し、今後の育児の土台となる役割を果たす。

【各グループの取り組み】

① あひるグループ

主に2歳児の子ども達のグループである。低年齢でセンターを受診したということはそれだけ早期から発達の遅れや自閉症の特性が顕著に見られる子ども達と言える。言葉がなかなか出てこなかったり、理由のわからないグズリや泣きが多く、時に奇妙な感覚遊びやこだわり行動に終始し、親を途方に暮れさせる。乳児期より親に関わってもらい「快」を覚えたり楽しさを感じたりすることが比較的少なく、天井を見て機嫌が良い等、自分の内なる感覚に耽るように過ごしたり、本来子どもの持っているであろう遊びへの意欲（エネルギー）を発散させる事もできず過ごしてきた子ども達である。

個別保育からグループ保育に移行しても目の前に知っている玩具があれば、状況の変化に何の気づきもなかったり、逆にグループになり何か違うというだけで状況が理解できず、泣いて終えてしまう日が続いたりする。未熟さと障害の重さが混在しており子ども自身が混沌としているので人数が少なめのグループを設定し簡単な枠の中で遊ぶことを丁寧に繰り返す。

とても未熟で、自分自身への気づきさえも弱い子ども達である。特定のものや感覚にこだわり、それ以外のものに気付かせるのはなかなか難しい子どもも多い。彼らにとってグループという形をとることの意味は、していることに少しでも気づきやすい

場を設定するということになる。

このグループでは保護者にしてもらうことがメインとなり抱っこをして走る、止まる、跳ぶ等、身体全体で感じることを親子で共有することから始める（共感）。活動の中で始まりの合図やよういドン等の合図に触れ、自分の意志ではない外からの働きかけに気付く、内と外の区別の始まりになる。簡単な体操やわらべ歌を繰り返すうちに音楽や歌で見通しがもてるようになってきたり、タオルやボール等小道具を使う遊びではそれを見せることが理解のきっかけや予告の手段となったりする。子ども達は人にしてもらって嬉しいという経験を重ねながら、人への期待が芽生え始める。絵本や見て楽しむものは、まずどんな形であれ、気付かせ注目するところから始め、同じ物を繰り返し見せることで気付くようになり、安心して期待する経験の積み重ねになる。そういった簡単な枠の中で遊ぶことが状況や周囲への気付きになり、外界への興味の芽生えになる。保護者は共に遊びながらなんとか伝わるように声かけや関わり方を工夫し「この子も分かるんだ」と実感しながら親子関係が少しずつ相互になり始める。ようやく子どもと共感できたり、伝わったと実感できたりすることで、子どもを見つめるまなざしがとても優しくなっていく、「伝わるんだ」という実感が保護者の関わりの質も量も大きく変えていく。

例えば、「よういドン！」の合図に気付く嬉しくなる。そのようなことが目標のグループである。

そして6ヶ月という期間をかけて子どもの成長ペースを共有し、あひるグループ以上に頻度の高い療育の中での丁寧な積み重ねが必要であると保護者とグループスタッフが考えた場合、つくし児童園のプログラムにつなぐこととなる。

②ぱんだグループ

2～3歳の子どものグループである。発達の遅れや言葉の遅れが明らかで、食事やトイレトレーニング等のしつけも進みにくく、「集団の刺激があれば伸びるのではないか」と児童センター等の育児サークルに行ってみるものの、提供される遊びや本の読み聞かせ等に参加せず、同年齢の子どもとの成長の差にかえって落ち込まれて…という悩みをもってセンター利用に踏み切った保護者も多い。また保育所（園）では乳児から幼児に移行し、周囲の子ども達との成長の違いがはっきりしてくる時期でもある。

子ども達は自分の興味、関心のある物しか見ていないことが多く、今まで見たこと経験したことにより状況を理解していることがほとんどである。人への関心の弱さや言語理解の難しさがあり、保護者や友達等人からの関わりに気付くにくい。その子ども達に周囲の情報（子どもや大人、玩具、している活動等）にどう気付きさせるかがポイントとなる。活動を繰り返しながら見通しを持たせ、「見たら分かる」「見たらいいことがある」経験を積み重ねていく。そのために保護者にも、子どもに「見せる」ことを繰り返し伝え、親子で「見たらわかる」経験を重ねることとなる。

知的な遅れも自閉的な側面も併せ持ち、自分の興味や関心で行動することが多い子ども達である。だが集団の力（エネルギー）というものを感じ取れるので、親子で楽しく遊びながら「見て、分かった！」という経験を増やすことが目的となる。

年齢的にも体格的にも親に抱かれる等密着して遊ぶことはまだ可能であり、これまでの分を取り返す意味も含め、多く取り入れられている。また動きのある活動や物を使う活動（ボール・スノーボード・大縄等）に取り組み、子どもの興味が続くように工夫

している。保護者は見せることが理解につながる事が分かれれば、見せるために子どもに合った伝え方を試行錯誤するようになっていく。立ったまま言葉のみで言うことを聞かせようとしていた保護者達が、子どもの目線の高さになり、顔を覗き込みながら指さしやジェスチャーを交え伝わっているのかを確認しながら関わる姿が見られるようになる。

活動はスモールステップで進める。例えば「よういドン！」では、最終の目標は合図を聞いてゴールに向かうことだが、最初は抱っこで参加し、進行方向に用意された大きな布をくぐる等自分の行く方向が分かるように工夫する。次は親子で手をつないで走る。その次は保護者が伴走者として走る。そして保護者がゴールになり、それを目指して走る。最後に子ども一人で走るといようにステップアップしていく。また慣れてくるとゴールにプラットフォームを置いてそれを目指したり、取って帰ってきたりする等工夫を加えながら遊びとして広げていく。

わらべ歌等は歌に合わせて動くことを楽しんだり、人形を使った見本を通して交替やおしまいが分かたりするような見せ方の工夫をしている。

絵本はベースの物に毎回新しいものを加えながら、知っているもののレパートリーを増やし、見る楽しみを経験できるようにしている。

見ること、経験することにより、理解し楽しめることが増えていく子ども達だがその情報は細切れのためひとつ終わったらおしまいになりがちである。そこで保護者は子どもの気持ちが途切れず、「次は何だろう？」と期待して、活動に参加するためには時系列の予告や状況の変化に気付かせることが必要と分かってくる。こうした中で「次は〇〇するよ」と、声をかけたり、用

意してあるホワイトボードの写真（本日のスケジュール）を見せるようにもなってくる。

また遊びと同じで ADL 面についてもスモールステップでの関わり、大人の介助量を徐々に減らしていくやり方、偏食の改善等は興味・関心の広がりと同様にリンクしているから見守ることといった助言をし、丁寧に支援する。

子ども達が一つずつ「分かった」という実感を持って生活することが大事なことであり、それには我が子の発達の特性を理解した関わりや支援が必要であると気付くためのグループである。

なお保護者の就労に伴い保育所（園）、こども園等に所属している子どもも増えているが、進路相談もばんだグループの大切な役割であり、あひるグループと同様につくし児童園での療育の積み重ねを勧めるケースもある。

③りすグループ

3～4歳の子どものグループである。自閉症の特性が典型的に認められる子どもから、成長とともに切り替えができるようになったり、外出時に保護者の姿を意識できるようになったり、言葉が伸びてきたり等表面的に観察される行動特性は和らいできた子どもまで参加する。多くの子どもが地域の保育所（園）やこども園、幼稚園で集団生活を開始しており、そこでの子どもの生活の様子とリンクさせながら、グループの子どもの姿を保護者と共有していく。

それぞれに「この子らしさ」というものもはっきりしてきて、保護者は、「〇〇が嫌だから」、「いつも△△しないから」、「(喋るので)分かっていると思うけど、知らん顔するんです」等これまでの親子の関わりの中で経験したことを基に「我が子らしさ」を語ってくれるが、発達の特性を知らない

ゆえの誤解であることも多い。大切なことはりすグループの中で皆と一緒にできるようになることではない。保護者が怒ってやらせようとしたり、「うちの子、これ嫌いだから」と諦めるのではなく、子どもの行動の意味を理解し、子どもに分かる伝え方、子どもが「できた」と思えるハードル設定を工夫できるようになることであり、信頼関係を土台とした親子のコミュニケーション作りに寄与することである。例えば「やらない」イコール「嫌い」ではなく、やり方が分からないだけであることが往々にしてあること、そういった場面で「どうやるん？」といった聞き直しが見られないこと、「やりたくない」と言葉で伝えるよりは走り回ってしまうこと、初めての活動は好奇心をそそられるよりも不安や緊張が高まりやすいこと、身体を使った活動を避ける背景には感覚の過敏さが隠れている等、子ども達の行動に影響する発達特性についても、しっかりと伝えていく。そして保護者の誤解を解きながら子どもの特性を理解し、必要な支援と分かりやすい関わりを考えることがこのグループの役割となる。

就園中の子どもがほとんどであるため、集団の中で遅れや特性が目立ってくるが、年齢を重ねても行動様式の変わりにくさを持つ子ども達は家庭の中で「してもらって当たり前」のことが多くなりがちで、保護者は子どものできることに気付いていない場合や、逆にやりにくさにお手上げになっている場合がある。登園の準備や着脱、後片付け等生活の細かな場面から、遊びでうまくいかないことや自分で言えないことまで親任せになっていたりと、園では同年齢の子ども達との差が明らかになってくる場面も多くなり、自信をもって過ごすことができにくくなっている。そこで、親子で遊びながら保護者にできないところを手伝ってもらい、できた喜びや褒められたことが、

「ぼく（わたし）もできる！」という自信になり、意欲につなげることが目的となる。

このグループでは、保護者の身体を使った木登りや駆け上がり、手押し車のように子どもがメインに頑張り、保護者はそれを支える役割になる活動を多く取り入れている。人形を使った見本をしっかりと見せてから取り組むが、最後まで見ない、見ただけで嫌がる、見たはずなのにどう動いていいのか分からない等、保護者にとっては「こんな簡単なこと」に困っている子どもに自分はどう伝えたり、教えたらやろうとしてくれるのかを考えつつ、関わらなければならなくなってくる。必要に応じてスタッフは、その場その場で個別に声をかけ、子どもの状況を説明したり介助の仕方を具体的に見せたりしながら、成功体験へと導く。保護者はスタッフのアドバイスを参考に試行錯誤しながら子どもに関わり共に頑張るので、成功した時は心から褒めてやることのできる。頑張ってできたことを褒めてもらえた子どもはそれが自信になり、「次も頑張りよう！」という意欲につながっていく。身体を使った活動は家庭でも簡単にできるので、夫婦間の報告から父親と遊ぶきっかけになってもいるようだ。

簡単なルールや友達と一緒に物を運ぶゲーム等、人を意識した活動も取り入れているが、相手に合わせることの難しさに改めて気付くことになり、他者への気付きを確認することができる。

製作では他のグループ同様、手順を全て見せてから始めるので意欲をもって取り組む姿が見られるが、使いたい道具や分からないことをスタッフや友達にうまく言えない、状況を見ないので時間は関係ない、思うように出来ず怒り出す等園での様子が想像される場面に出会う。それぞれの場面で保護者は子どもの状況や思っていることを考えながら言い方ややり方を教えたり周囲

に気付かせて、できあがりへとつなげる。

子どもと共に活動しながら子どもに必要な関わりや特性として認識しておかねばならないことが分かってくると、園生活で困る場面が予測できるようになり、これまで園任せであったことについても家でできることは何かを考えるようになる。例えば、行事前の下見に行ったり遠足の行き先を映像で見せたりシミュレーションをする。水遊びに備え、着替えの練習やいつもと違うことがある時は予告をする等、子どもが安心して園生活を送れるように工夫したり関わりが変化してくる。また、そういうことを通して担任ともコミュニケーションが増えてきたという話も聞く。ひとつひとつ、一人でできることを増やしながらか子ども達は自信を深め意欲をもって日々の生活が送れるようになる。そのために保護者が子どもの特性を理解し、必要な支援や関わりを考えるようになっていくためのりすグループである。

④きりんグループ

4～5歳で、知的には境界域の遅れから年齢相応に該当する子ども達のグループである。このグループの子ども達の多くは「設定保育に参加しにくい」、「勝敗にこだわり過ぎて友達とうまく遊べない」等の所属園の指摘から当センターにつながる。「ちょっと落ち着きはなかったけれど」「言葉は遅れていたけれど、保育所行って話し出したし」と、身の回りのことも自分でできることが増え、家庭の中で保護者が困ることがない子どもが少なくなく、診断を「否定はしないものの半信半疑」という保護者も多い。「私がそうだった」「父親がそうだった」から「大丈夫」という気持ちもしばしば聞かれる。一方ですでに保育園では全く問題がないのに「家で大変」と言われる子どもも一定数存在する。すでに保護者との関係が

「怒られる⇔反抗する」の負のスパイラルに入っている子どもも中にはおり、注意が必要である。

この時期の保護者とは子どもの発達特性をしっかりと共有することが欠かせない。みんなと一緒にできているように見えても周りを見て真似をしていることが多く、心で理解して取り組めていない活動が多々あること、「成功-失敗」と二元的に物事を捉えがちな子ども達には「ちょっとうまくいかない」は失敗として認知され、ふざけたり、やろうとしないことで回避する傾向にあること、年齢が上がると大人は子どもを叱って教えようとするが増えるが、このグループの子ども達は「怒られている」ことは分かって「何を怒られているのか」は正確に把握していないことが多く、「ちゃんとしなさい」、「先生の言うこと聞いて」という曖昧な言い方ではなく「〇〇を～しよう」、「それでOKです」といった具体的な説明+“OKの確認”で教える重要性等が主な確認点となる。ここで保護者が子ども目線に立ち、子どもに共感的な声かけができるようになると、関係が好転していく。

文字や数の理解に長けている子どもも多く、その場合保護者の子どもへの評価は高くなりがちであったり、子どもの困り感を軽く考えてしまう傾向がある。だが就学後子ども達が困るのはイマジネーションの乏しさからくる状況の察しにくさであったり、肝心要の一言が発せられずに不快な気分をため込んだり、興味・関心外の活動や勉強に取り組まされること等である。きりんグループでは就学も見据え、子どもの強みと弱みを客観的に把握し、「強みは伸ばす」、「弱みは大人の手厚い支援のいるところ」という視点を保護者に提示することが必要である。

子ども達は言葉のやりとりもさかんになるが、分かっているようで分かっていない

ことが多く、相手の意図や気持ちの理解が難しいため友達とのトラブルが増えたり、逆に一人でいる方が楽しかったりする。既に個別のリハビリが開始されていることも多いので、個々の課題については保護者もそれなりに理解しているがそれが集団の中でどう作用しているのかはなかなか分かりにくい。一人ひとりの問題となる行動はそれぞれだが、問題の根っこにあるものは発達特性であることに変わりはない。

このグループでは簡単なルールのある遊びを取り入れ、子ども同士で楽しんだり協力したりする場面を作る（しっぽ取り、フールツバスケット、リレー等）。しかし、勝敗へのこだわりやルールの理解の難しさ、ゲームの楽しさが分からない、テンションが上がると動きが激しくなる等我が子の困っている場面に保護者は向き合うことになる。また逆に、丁寧に遊びが展開されるので、思いのほか楽しめることもある等発見の場にもなる。

製作は指示を聞いて動く場面や個性に任される場面もあるので、それぞれの課題が見えてくる。活動を通して確実にできることとそうでないこと、得意なことと苦手なこと等を整理し、本当に必要な支援は何かを考える手がかりになる。

グループワークでは、小学校入学について情報提供をしているが、漠然とした不安をもっている保護者達が、入学に向けて子どもに必要な支援を具体的に考えるきっかけとなる。入学については希望進路がどうであれ、子どもに適切な進路を考えることを避けては通れない。子どもの姿は違っても同じ思いを抱える親同士が会うという意義が大きいグループである。

表3 さくらんぼグループ利用者数

	H29年度	H30年度	R元年度
あひる	8	8	5

ばんだ	23	12	13
りす	19	35	41
きりん	18	7	12

【さいごに】

外来保育は、診断・告知直後の保護者と子どもに出会う。我が子に診断名がついたことによる様々な葛藤を抱えながら来所する保護者の気持ちに寄り添うように努めながら、保護者と子どもの発達特性の共有をはかり、子どもの目線に下り、その視点を理解する場である。そしてグループの中では子どもの困り感を知り、我が子にフィットする関わりを共に模索する。

主治医より「保育」プログラムを呈示されたときに「保育って何?」「もう保育園行っているし」と半ば不審に思いながら来所を始め、「こんなに子どものことをじっくり見ることってない」「(家庭では兄弟もいるし、家事もあるが)ここでは子どもにじっくりと関わることができる」としばしば保護者が言われるが、さくらんぼ保育の時間が保護者が我が子一人に濃密に向き合う時間変わっていく。その中で保育を開始した時には子どもとどう関わればよいのか考えあぐねていた保護者が子どもの行動の意味を自ら読み取り、対応に自信を深め、ささやかな子どもの成長に気付き、その一つ一つを喜びとともに報告してくれる。さくらんぼグループ最終日に「私のためのグループでした」「私でもなんとか育てていけると思えるようになりました」と感想を述べてくれる保護者がある。子どもの成長はもちろんのこと保護者の変化に立ち会うことが「外来保育をしていてよかった」と心から思う瞬間である。

障害告知により子どもの未来や自身の子育てへの不安が増大し混乱していた保護者が同じ立場の仲間と出会い、子どものことを理解して関わることができ始める。その

中で失くしかけていた「この子の親である」という自信を再び取り戻していくようだ。私達はそんな保護者の気持ちに寄り添い、そして子ども達の伝わらない思いを代弁しながら母と子をつなぐ役割を今後も果たしていきたいと思う。

障害の有無にかかわらず子育ては山あり谷ありである。しかし子どもに障害があることで、一つの山を越えにくかったり、谷が深かったり、平坦な道が少ないことがしばしばある。そのようなピンチにでくわした時に「ルネスに相談しよう」と保護者が連絡をくれたり、「幼児期に子どもと向き合って、ああやって乗り越えてきた」と外来保育での経験を思い出し、だから「できる」と自信をもって取り組んでもらえるならば、“母と子の支え合い”をモットーに名付けられた“さくらんぼ”保育のもっとも重要な役割が果たせたということだと考える。